



漢方トゥデイ

2022年8月4日放送

使ってみよう歯科口腔領域と漢方⑨

実践：歯科口腔領域における証の考え方

東京大学大学院 医学系研究科 イートロス医学講座

特任准教授 **米永一理**

(2024年4月より 日本大学歯学部 摂食機能療法学講座 主任教授)

第8回の『食欲不振に補中益気湯/十全大補湯、疼痛・神経痛に葛根湯、筋肉・関節痛・顎関節症に芍薬甘草湯』は如何だったでしょうか。私の担当致します漢方トゥデイでは、漢方初学者の方向けに、歯科口腔領域の漢方薬を使えるようになることを目的としてお話をしております。第1回から第4回が総論、第5回から第8回が各論をお届けしました。当初、計8回で終了予定でしたが、お陰様で、多くの先生方から反響を頂いたため、本日を含め、2回分延長をお届けします。

第1回では、本シリーズを開始するにあたって、『東洋医学的な診察の話を、まずはせずに、西洋医学的にどのように漢方薬を処方していけばいいか、つまり、診断をして、それに対してこういう漢方薬が使えますよというようなお話しをして行きます。』とお伝えしました。この考えの下、ここまでの8回を聞いて下さった皆さんは、既にある程度漢方薬が使えるようになったかと思います。

そこで、実践編では、東洋医学的な診察の話をして、漢方医学の理論を把握し、より実践的に使えるようになることを目的としようと思います。実践の1回目として『歯科口腔領域における証の考え方』と題し、お届けします。

まずは漢方医学と西洋医学の治療に至る違いについてお話しをします。

西洋医学では、患者本人の自覚症状と、病変の確認や検査異常などによる他覚所見から、症候・疾患を確認して、それを下に診断をし、病名をつけて、そして治療法を選択していきます。一方東洋医学では、自覚症状を下に、四診をして、証の判定をし、証が決まれば自動的に治療

法がほぼ決まります。

このことは、第3回でお話した通り、西洋薬は下流・末梢側に働き、漢方薬は上流・中枢側に働くイメージをもっていると、漢方医学と西洋医学の使い分けがしやすいかと思います。つまり、西洋薬と漢方薬は組み合わせと良い場合もあります。また、医学部学生が学ぶ教科書である羊土社の漢方医学講義には、「証とは患者が現時点で現している症状を気血水、陰陽・虚実・寒熱・表裏、五臓、六病位などの基本概念を通して認識し、さらに病態の特異性を示す症候をとらえた結果を総合して得られる診断であり、治療の指示である」と書かれています。一言でいうと『証』を認識するために、『気血水、陰陽・虚実・寒熱・表裏、五臓、六病位』を確認する必要があると理解頂ければと思います。しかしながら、漢方薬に馴染みがないと『気血水、陰陽・虚実・寒熱・表裏、五臓、六病位』ってなんだ！？と思われると思います。よって、今回は『証』と『気血水、陰陽・虚実・寒熱・表裏、五臓、六病位』に関して触れていきます。

ここからは「証」についてです。

漢方的診断では、「証」の使われ方は大きく3つあります。

一つ目は、「処方証」です。葛根湯証などそれぞれの漢方薬名で表わされ、その処方が有効と推察される漢方的な病態あるいは診断を表す証です。二つ目は、「二元的病態把握法で分類した病態」です。例えば、陽証と陰証、実証と虚証、熱証と寒証などです。そして三つ目は、「さまざまな漢方的病態把握法により得られた所見」です。例えば、腎虚証、上熱下寒証などです。

一つ目の「処方証」は、第8回までに学習してきた内容であり、処方してみて効果があれば、処方証が合っていたと言うことができます。よって、ここでは二つ目の「二元的病態把握法で分類した病態」、および三つ目の「さまざまな漢方的病態把握法により得られた所見」による証の判定方法をお話しします。

では最初に陰陽についてです。

陰陽は、虚実・寒熱・表裏などを包括する上位概念です。新陳代謝が活発な場合が陽、新陳代謝が低下している場合が陰です。

そしてこの陰陽を判断するために、虚実・寒熱・表裏があります。

虚実は、抵抗力・反応力が低下している場合が虚、抵抗力・反応力が充実している場合が実です。寒熱は、温めると改善する冷えた病態が寒、温めると悪化する熱のある病態が熱です。表裏は、部位を示す尺度であり、体表面が表、身体深部や消化管が裏です。

次に気血水についてです。

気血水は、身体を構成する三大要素であり、気虚・気滞・気逆・血虚・瘀血・水滞（水毒）があります。

気は、生体の生命活動を担う根源的要素であり、精神活動・生理機能の制御・活性化を担っています。血は、血液に加え、血管の状況、それらに及ぼす自律神経系、ホルモン系の作用を含めた概念です。水は、細胞内液、細胞間液など組織内の水分やリンパ液の状態を示します。

漢方医学では、気血水の3つの流れをバランスよく、滞りない状態にすることが治療目標となります。

ここでは歯科口腔領域に特に関係する、水の失調で現れる症状と治療例を具体的に示します。水滞（水毒）は、身体における水分が量的、あるいはその分布に異常をきたした病態であり、分布の異常として、浮腫、そして腹水・胸水・関節水腫など体腔液の過剰、さらに分泌の異常として、尿量・発汗量異常、鼻汁、帯下、下痢などの病的な水様分泌物、頭痛、末梢性めまい、口渇などの症状がみられます。水滞（水毒）に対する治療は、代表的な処方として、陽証であれば五苓散、陰証であれば真武湯があり、その他、防己黄耆湯、小青竜湯などがあります。

次いで六病位についてです。

六病位は、病期（傷寒）の進行状況、闘病反応の場であり、太陽病・少陽病・陽明病・太陰病・少陰病・厥陰病があります。

太陽病は、かぜのひき始めなどで、症状所見が体表部にとどまっている状態です。少陽病は、かぜをこじらせ、食物の味がまずく、食欲が低下した状態です。陽明病は、病変が完全に身体深部に移り、高熱が持続する状態です。太陰病は、消化管を中心に機能が衰え、気力と体力が低下した状態です。少陰病は、さまざまな臓器の機能がより低下し、倦怠感が強まった状態です。厥陰病は、冷えが身体深部まで及び、様々な臓器機能が著しく低下した重篤な状態です。つまり太陽病が軽症で厥陰病に行くほどより重症とイメージしておくとうわりやすです。

太陽病・少陽病・陽明病は陽証病期であり、太陰病・少陰病・厥陰病は陰証病期です。

この三陰三陽の六病位にみる急性熱性疾患の時間的推移は、陽証病期は表の熱が中心となる病象であり、陰証病期は裏の寒が中心となる病象となります。

逆に、六病位を表裏でみると、表証であれば太陽病であり、半表半裏証であれば少陽病、裏証であれば陽明病以下になります。

さいごに五臓についてです。

五臓は、肝・心・脾・肺・腎があります。この五臓は西洋医学の臓器とは異なることに注意が必要です。これらの中で肝、脾、腎が特に重要であり、これらに異常がある状態を、肝の失調、脾虚、腎虚と言います。肝の失調は神経過敏の状態であり、対応する漢方薬の例として抑肝散があります。脾虚は消化機能の低下の状態であり、対応する漢方薬の例として、六君子湯や人参湯があります。腎虚は加齢に関連する症状や下半身の機能低下の状態であり、対応する漢方薬の例として八味地黄丸があります。

ではお時間のようです。

今回は、『歯科口腔領域における証の考え方』を中心にお伝え致しました。少し難しかったかも知れませんが、キーワードはそれほど多くはありません。漢方医学の言葉が分かると、漢方治療がさらに楽しくなります。次回は、いよいよ最終回です。実践の2回目として、『歯科口腔領域における漢方医学の診察の仕方』を中心にお届けします。